

若年者五年祭

これの靈舎に鎮め奉り坐せ奉る故△△△△大人之靈の御前に慎み敬い恐み
恐みも白さく

久方の空行く月の清き光にも 立迷う浮雲の障りがある如く 春山に咲き
乱る、梢の花にも吹き荒ぶ嵐の嘆きがある如く 行末かけて頼みたりし汝
大人はも あわれ現身の慣い得免がれ給わず 何時迄も残り惜しきこれの
現世を退向になして過ぐる昭和六十年○月○日齡二十五歳というをこの世
の限りとして 逝く水の還らぬ如く 入る月の影消えるが如く 果敢なく
遠く遙けき親神のふところに隠り入り給いぬ

今も尚 現世の何処かに健やかに在すが如く思ほゆるも 矢張り呼べども
その答えはなく 戸の外に出でて見渡せどその御姿はあらず まことに云
わぬ術為す術なし

隈なき月影を見ればありし日を偲び き、やかなる風の音を聞けば あの
日あの時を思い起こしつ、 春を迎え秋を送りしに 早くも丸五年は夢の
間と過ぎ去りて 未だに淋しき中にも今し五年の靈祭かくの如く仕え奉る
時となりにけり

故に家族親族教会の人々 これの席に打寄り集い 徳薄き生まれながら
その故にこそむしろ大切に育てられし 幼き頃はいより小学生の頃 中学
生の頃 次いで○○工業高校に学ばれし頃の汝大人の童顔と丸くぼちやつ
とした姿を偲びつ、 学舎を卒えるといち早くちばを慕いて修養科三ヶ月
の人となり 引続き 神奈川学生会に席を置き 親神の御教 教祖のひな
がたを求める若き道の子たちと深く交わりつ、月を重ね年を経されたり
今にして思えば汝大人はひたすらその中に生き甲斐を見出し 厳しき世を
生き抜く力を得むと望まれしならむ やがて○○工務店をふり出しに 内
装屋の仕事に青春をぶち込み 「父亡き後は僕が母の力とならむ」とい
けなげなる言葉を出しておられた その後は○○に通いしものと思いき
るに 母が横浜に出られし留守中 △△△の○○莊より俄にただ一人淋し
く旅立たれるとは…… あ、汝大人だけは母の信仰を受け継ぎ 近き将来
よふぼくとして道を力強く歩まれむものと心より期待せしに……

汝大人を懐かしむ心もいと深きまに／＼ 心より靈を宇良賀志奉らくと
御前に御酒御食種々の味物を供え奉りて 露の玉串捧げ奉り拝み奉らくを
平けく安けく聞食し諾い給いて 遺れる○○家の家族親族諸人等のこれか
らの遙けき道を己が向々あらしめ給わず 互い立て合う陽気ぐらしの態に
更に深く近づかしめ給えと恐み／＼も白す